

東京書籍

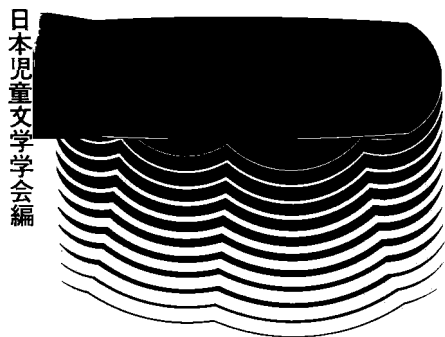
日本児童文学概論



日本児童文学学会編

東京書籍

日本児童文学概論

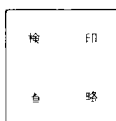


日本児童文学学会編

日本児童文学概論

昭和51年4月2日 第1版第1刷発行 ©

昭和53年11月1日 第1版第4刷発行



編著者 日本児童文学学会

〒114 東京都北区十条台1-7-13

(東京成徳短期大学幼児教育科 滑川研究室内)

発行者 東京書籍株式会社

代表者 鈴木和夫

印刷者 東京書籍印刷株式会社

代表者 山本芳郎

東京都北区堀船1丁目23番31号

発行所 東京書籍株式会社

東京都台東区台東1丁目5番18号(〒110)

3090-555011-5313

定価1800円

序文

わたしはまだ学生のころ日本文学史の講義を垣内松三先生にうかがった。

むずかしくてよくわからなかったが、その中でいまだに忘れかねている一句がある。

「童話は文芸復興期の前ぶれとして生まれてくる。あたかも夜明の微風のように流れてくる。」

このことばの裏づけになるような例証をいくつもあげられた。古事記にあらわれた物語や万葉集に顔を出す民話風の物語など、いろいろなものを語られた。わたしはその例話がおもしろくて聴きいていたことを思い出す。第二次世界大戦がすみ、どうやら落ち着きを取りもどしたわが国は、このごろになって児童文学なる名によって童話・童詩・童劇などの作品が出はじめるようになった。

まだ日が浅い、これからいつその製作と研究とが進められていくにちがいない。

日本の文化が戦後かなりの早さをもって積み重ねられてきたが、今日にいたっていささかゆきづまった感じがな

いではない。
科学主義があまりに顔を出したせいではなからうか。数をたのんで押しまくる形式主義がのさばってきたからではなからうか。おれがおれがと狭い小さな主観主義をひけらかすためだろうか——みじめな文化の皮をひつかぶるようになった。

経済界しかり、政治界しかり、学界も芸術界も同じような道どりをとって傾き流れてきた。ここでこの暗い流れをひんまげて、新しい息吹をふきこまないかぎり、いよいよ日本文化は崩れていくだろう。

垣内先生は、くしくも「童話誕生は夜明けの空を吹いてくる微風」といわれた。明るさをふくみ、新鮮さを孕み、望みをいっぱい抱いた先駆が、いわゆる児童文学だと語られたのだとわたしは解している。

なんとしても息ぎれすることなく、これから日本の児童文学なるものを育てていきたいものである。この運動は、たんに少年少女たちの生活向上を意味するばかりではない。日本人のこれからの生きる土台を築くうえに欠くことのできない要素であるとわたしは思う。

いまの混乱は夜明以前のものである。

やがて東天が白みかけてくるのだ。

そこへさわやかにしておおらかな微風が天地を流れてくる。

いやしくも児童文学を語り、その作品を生み出そうとするものは、目をはるかな世界に向け、あせらずにこの道を築こうではないか。

一九七六年四月

日本児童文学学会会長 石森 延男

編集のことば

一、本書は、同時に企画編集刊行された『世界児童文学概論』とともに対をなすものである。

二、本書は、日本児童文学の歴史と現状およびその認識と理解を、簡潔に展望し考察して、児童文学に興味関心をよせる人々の要望にこたえようとしたものである。そのため日本児童文学学会は、総力をあげて、本書の企画・編集にあたった。

三、児童文学とは何か、の基本的な考察に続いて、その歴史と現状を概観し、児童文学の諸形態の考察を展開した。さらに、作品論をふくんだ作家論におよび、最後に日本児童文学研究と思潮を扱い、あわせて参考文献を載せて、研究者への参考とした。

四、なにぶんにも、限られた紙数内にまとめるということで、執筆者各位に重い負担をかけることになったが、最新の研究成果をふまえた密度の高い内容とすることができた。

五、したがって、本書は、これから児童文学を学習・研究する学生諸君のみならず、ひろく児童文学に関心をよせる人々にも有用に役立ててほしいと願っている。読者が本書の提供する組織的な知識や考察にふれて、さらに新たな関心をよびおこして、日本児童文学研究にたずさわるようになるならば、本書の編集意図は、十分達成できたと言えるだろう。

六、本書の姉妹編『世界児童文学概論』および『児童文学研究必携』（いずれも東京書籍刊）を併読されることをおすすめしたい。なお日本児童文学学会編集の既刊『赤い鳥研究』『アンデルセン研究』（いずれも小峰書店）があることを付言しておく。

七、本書の刊行を引き受けられ、格別のご配慮をいただいた東京書籍株式会社、特に出版編集部長 宮坂正房氏・小山康栄氏ほか編集部の方々のご厚意とご尽力に感謝申上げる。

一九七六年三月

執筆者紹介（五十音順。○印は編集委員）

赤座憲久 大垣女子短期大学教授

安藤美紀夫 日本女子大学助教授

アン・ヘリング 政法大学助教授

猪熊葉子 聖心女子大学助教授

○上野明雄 （株）小学館学年誌編集部勤務

大久保典夫 東京芸芸大学助教授

大藤幹夫 大阪教育大学助教授

岡田純也 京都女子大学助教授

○恩田逸夫 明治薬科大学教授

勝尾金弥 愛知県立大学講師

上笙一郎 児童文化評論家

木俣修 実践女子大学教授

桑原三郎 慶應義塾幼稚舎主事

紅野敏郎 早稲田大学教授

斎藤寿始子 大谷大学短期大学部講師

清水真砂子 青山学院女子短期大学講師

神宮輝夫 青山学院大学教授

鈴木敬司 政法大学講師・東京家政大学講師

関口安義 都留文科大学助教授

続橋達雄 国学院大学栃木短期大学教授

○冨田博之 青少年文化研究家・日本演劇教育連盟事務局長

○鳥越信 早稲田大学教授

○滑川道夫 東京成徳短期大学教授

西沢正太郎 埼玉県狭山市新狭山小学校長

西田良子 北海道教育大学講師・藤女子短期大学講師

根本正義 大東文化大学講師・同第一高等学校講師

畠山兆子 東大阪短期大学講師

○浜野卓也 東京都立桜町高等学校教諭

飛田文雄 二松学舎大学講師

○福田清人 実践女子大学教授

○藤田圭雄 日本児童文学者協会会長

本田和子 お茶の水女子大学助教授

増子正一 東京都立三鷹高等学校教諭

向川幹雄 帝国女子大学助教授

○村松定孝 上智大学教授

弥吉菅一 大阪教育大学教授

万屋秀雄 鳥取大学講師

目次

第一章 児童文学とは何か

第一節 児童文学の定義……………三

- 一、児童文学の本質と定義の關係 三
- 二、童話・昔噺・お伽噺・少年用文学 二三
- 三、児童研究の対象 六
- 四、童心主義思潮のなかの定義 七
- 五、模索の時期の定義 三
- 六、現代の諸説 二四
- 七、定義の視点 二七

第二節 日本児童文学の特色……………二六

- 一、「童話」の成立 二六
- 二、なぜ童話は幼い子どものものであるとしてつくられたか 三三
小川未明における「童話」の意味——坪田譲治の「童話」
- 三、「童心主義童話」以後 三〇

第二章 日本児童文学の歴史

第一節 明治期……………四〇

- 一、明治児童文学の誕生 四〇
- 二、巖谷小波の業績とその意義 四三
- 三、巖本善治夫妻の活動とその意義 四四
- 四、明治児童文学の特徴とその問題点 四七

第二節 大正期

一、大正前期

「赤い船」・「子供の国」(童話・童謡の先駆的作品)——「少年文学研究会」(日本最初の児童文学研究団体)——大正初期の児童雑誌——「立川文庫」(大衆読物)——「愛子叢書」(自然主義文学者の童話執筆)——外国児童文学の受容——ジャーナリズムの童話欄

二、大正中期

第一次世界大戦後の教育界——「赤い鳥」の創刊(童心主義児童文学の開花)——「赤い鳥」の命名——「赤い鳥」の童話——「赤い鳥」の童謡——「赤い鳥」の音楽——「赤い鳥」の童画——「赤い鳥」の綴方・自由詩・自由画——「赤い鳥」の少年少女劇やノンフィクションもの——「赤い鳥」類似雑誌の群立

三、大正後期

宮沢賢治——講談社ブーム——少女小説——新しい動向

第三節 昭和・戦前期

一、プロレタリア児童文学

同人雑誌の発刊

二、日常生活での子どもを描いた千葉省三と坪田譲治

三、生活童話の成立

四、指示要綱と復興現象

五、昭和・戦後期

第四節 民主的短編童話の時代

一、異色の長編児童文学

二、『ノンちゃん雲にのる』——『ビルマの竖琴』——『二十四の瞳』

三、児童文学の批評・論争

- 四、同人雑誌の台頭 全
- 五、その他 全

第五節 現代……………六

第三章 児童文学各論

第一節 詩・童謡……………七

- 一、日本の近代における少年少女とうた 七
- 二、近代創作童謡の生誕と展開 七

第二節 童話と小説……………一〇三

- 一、「童話」という名称の使用について 一〇三
- 二、巖谷小波のお伽文学とは何か 一〇四
- 三、童話の成立 一〇五
- 四、リアリステイックな童話への移行 一〇九
- 五、プロレタリア児童文学による児童観の変化——小説への過程 一一三
- 六、小説時代への移行 一二五
- 七、児童文学にリアリズムは存在するか 一二七

第三節 絵本……………一二九

- 一、「絵本とは何か」という問いをめぐって 一二九
- 二、絵本と児童文学 一三三
- 三、絵本を「読む」ということ 一三三
- 四、絵本の系譜——我が国の場合—— 一二四

第四節 ノンフィクション……………一三七

- 一、ノンフィクションの特質 一三七
- 二、ノンフィクションの歩み 一二〇
- 三、現状 一三三

第五節 伝承文学……………一三四

一、伝承文学とは何か……………一三四

民族・民衆文化としての伝承文学——伝承文学の形式と歴史

二、伝承文学と子ども……………一三七

子どもにとってなぜ必要か——子どもと伝承文学を繋ぐもの

三、伝承文学の児童文学化

再話と再創造——児童文学としての伝承文学の歴史——これからの課題

第六節 戯曲……………一四三

一、児童劇における戯曲……………一四三

二、児童劇（戯曲）の歴史の概要……………一四四

「お伽芝居」から「児童劇」へ——児童劇の現状と課題

三、放送台本とシナリオ……………一四四

第四章 日本児童文学の作家と作品

第一節 作家論……………一四五

青木茂（一五）——秋田雨雀（一五三）——芥川龍之介（一五五）——有島武郎（一五七）

——石井桃子（一五九）——石森延男（一六三）——巖谷小波（一六五）——宇野浩二（一六七）

——岡本良雄（一七〇）——小川未明（一七二）——北川千代（一七四）——佐藤春夫（一七六）

——島崎藤村（一八〇）——鈴木三重吉（一八三）——千葉省三（一八六）

——壺井栄（一九）——坪田譲治（一九五）——豊島与志雄（一九九）——新美南吉（二〇二）

——浜田広介（二〇五）——平塚武二（二〇八）——横本楠郎（二一一）——宮沢賢治（二一四）

——椋鳩十（二一八）——山本有三（二二〇）——塚原健二郎（二二三）

第二節 童謡・少年詩の作家と作品……………一三五

第三節 大衆児童文学の作家と作品——「少年倶楽部」を中心に……………一三三

第四節 現代児童文学作家論……………三七

- 一、転換期の長編作家——国分一太郎、福田清人、北畠八穂 三七
 - 二、空想物語の現代的開花——いぬいとみこ、佐藤さとる 三九
 - 三、読者意識の方向——山中恒、古田足日 四一
 - 四、民話モチーフの現代的展開——松谷みよ子、斎藤隆介 四四
 - 五、ナンセンス・テールの開花——寺村輝夫、今江祥智 四五
 - 六、幼年童話の意識変革——中川李枝子 四七
 - 七、大石真、長崎源之助、今西祐行、前川康男、神沢利子 四七
- 第五節 文壇作家の児童文学……………四九

- 一、明治期文壇作家の児童文学 二九
- 二、大正期文壇作家の児童文学 三三
- 三、昭和期文壇作家の児童文学 三七

第五章 児童文学の研究と批評

第一節 研究の領域と方法……………三七

- 一、研究の四領域 三三
- 二、方法論 三五

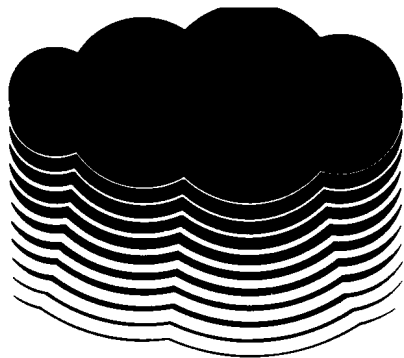
第二節 研究批評の歴史……………三七

- 一、児童観の黎明——植木枝盛・若松賤子 三七
- 二、『少年之玉』編纂の要旨と『こがね丸』文体論争 三八
- 三、児童文学の呼称と唱歌批判 三九
- 四、少年文学研究会と童話の研究の自立 四一
- 五、文芸教育論 四一
- 六、研究の深まり——芦谷芦村（重常）、松村武雄 四二
- 七、童心主義批評——北原白秋 四四

八、プロレタリア児童文学批評——横本楠郎	二七五
九、少国民文学批評	二七六
十、絵本理論の展開と「少年文学史」	二七六
十一、批評家出でよ!	二七八
十二、伝統否定の評論と基礎的研究の開始	二七九
十三、菅忠道 日本の児童文学と研究の発展的細分化	二八〇
第三節 研究批評の現状と問題点	二八〇
一、研究批評の三つの型	二八一
二、欧米児童文学との関連で	二八三
三、書き手、与え手、読み手の問題	二八四
付、主要文献リスト	二八五

装丁 勝井三雄

日本児童文学概論



第一章 児童文学とは何か

第一節 児童文学の定義

一、児童文学の本質と定義の関係

児童文学とは何か、が根元的に問われることは、現代の児童文学観が多様化し、はげしくゆれ動いて、社会的通念をうしなっているからであろう。作家はそれぞれの立場から、自らの作品活動を通して、この問いに答え続けるだろうし、研究者は児童文学理論を確立するために、探究し続けるだろう。はげしくゆれ動く現代の児童文学状況であればあるほど、この問いかけが、前進のために重要な意味をもつに違いない。

児童文学とは何か、に簡明に答えることは容易なことではない。ことに、その意義を限定し、その概念を、他の概念と区別して限定しようとする「定義」の形で示すことは、困難な作業である。「定義」の形で、児童文学の本質を十全に言い尽くすことはさらに至難である。主概念を集約的に限定するために使われた用語の意味をさらに限定していかないと、表現者の意図が明確にならない場合が多い。それを拡充するならば、一卷の児童文学論にならざるを得ない。そのため、定義不要論も起こるのであるが、端的に児童文学とは何かを集約的に表現することは、けっして無意味なことではない。それぞれの筆者が、歴史的・社会的基盤に立って、自らの児童文学観から「児童文学とは何か」を探究し集約した結果であり、同時に将来の児童文学探究の出発にもなり得るからである。

したがって「定義」を読むとき、その限定された表現の背後に、それぞれの筆者の児童文学論が広がっていることを確認しておく必要がある。

二、童話・昔噺・お伽噺・少年用文学

児童文学が、子どもたちの読み物として成立する前は、昔噺(民話)・伝説・神話などの伝承説話のなかから子ども向きの話編が選び出されて、子どもに語り聴かせることがおこなわれてきた。十四世紀の『異制庭訓』(虎関和尚)に記録されている「祖父祖母之物語」(じじばばの物語)、江戸期の山東京伝の『骨董集』上編の「童話」は(むかしばなし)と訓読みさせているし、著書『童話考』は(どうわこう)と音読みする。滝沢馬琴の『燕石襟志』巻四の「童話」は(わらべものがたり)と訓じ、黒沢翁満の『童話長編』は音読する。これらの言葉からも観察されるように、語り聴かせる「ものがたり」に、児童文学の源流があった。

また、古く天平時代(七二九～七四九年)に端を発する「絵巻物」に取り上げられてきた「猫の草紙」、「浦島太郎」、「猿蟹合戦」、「花咲翁」、「兎の仇撃」などの昔噺が子どもの興味をひき、江戸期に印行される「猿蟹合戦」、「桃太郎」、「舌切雀」などを含む「絵草紙」(草双子)が子どもの生活にはいりこむ。そのはいりこみかたは、絵に対する興味が主体で、絵に添えられた文を自力で読める子はごく限られた層の子どもであったから、多くは「読み聴かせ」られたり「語り聴かせ」られたりした。こうした「語り」の音声表現と、「絵」の絵画表現と、「文字」の文章表現との統一に、児童文学的機能が見いだされる。その内容は、昔噺・伝説・神話・軍談・史伝などであるが、広義の昔噺が中心となつて、明治二十年代におよんでいく。児童文学の実態が「昔噺」である伝承説話の時期が続いていた。

明治初期の「文明開化」の波瀾のなかで訳出された、例えば、渡辺温『通俗伊蘇普物語』(一八七)、斎藤了庵『魯敏遜全伝』(ロビンソン・クルーソー)(一八七)、永峰秀樹『暴夜物語』アラビアン・ナイト(一八七)、山田正隆『回世奇談』(ロビンソン・クルーソー)(一八七)、井上勤『月世界旅行』(一八八〇)、同『月世界一周』(一八八三)、同『六万英里海底』

* 「文化十年より凡五百年前(一三二三年)の書なれば祖父祖母の童話のふるきをおもふべし。五百年前の童話、唯童の口すさみにつたふるのみにて今に残れるは不思議といふべし」(『骨董集』上編二十七)。

旅行』(ジュール・ベルヌのSF(二八四)、同『人肉質入裁判』(ラムのシェイクスピア物語)(二八三)などが、成人向けではあったが、その内容が「語り」として子どもの世界にはいりこんでいる。昔噺とともに、話し言葉で語られる。ここでも児童文学の実態が「語り聴かせ」の中にあった。

また、横浜居留のキリスト教宣教師ダビド・タムソン David Thomson, チャムバレン B. H. Chamberlain, ジェームス夫人 Mrs. T. H. James らが、日本の昔噺を蒐集して英訳、多色刷画本^{*}を出版した。第一冊「桃太郎」が、一八八五年九月に刊行され、一八九二年までに二十冊の『日本昔噺』を出し、なお続刊した。彼らは、この昔噺シリーズを Japanese Fairy Tale Series と命名している。フェアリー・テールズ^{*}の概念を適用していることに注目すべきだろう。

巖谷小波(一八七〇—一九三三年)は、一八九一年一月『少年文学叢書』(全三二巻)の首巻に『こがね丸』を著して、日本児童文学の夜明けの鐘を打ち鳴らす役割を果たした。序を寄せた森鷗外は、これを「穉物語^{こどもものがたり}」と呼んだが、小波自身は次のように述べている。

「此書題して『少年文学』と云へるは少年用文学との意味にて、独逸語の Jugendschrift (Juvenile Literature) より来れるなれど、我邦に適當の熟語なければ、假に斯くは名付けつ。鷗外兄が所謂穉物語も同じ心なるべしと思ふ。」

ここで本格的な読み物としての「少年用文学」が始まる。

明治二十年代にはいつて「少年園」、「日本之少年」、「少年文庫」、「少年文武」、「少年學術共進会」などの雑誌がすでに発行されていたから、小波がユーゲントシュリフトに「少年文学」をあてはめたものだろう。「文学」の概念も現代と違っていて、このころは、一般に広い「読み物」という意味に用いられていたから、「少年用読

^{*} クレープペーパーに印刷したため「ちりめん本」と言われる。長老派教会の宣教師たちが昔噺を蒐集編成したもの。来日外人の土産品として昭和期におよんで発行(長谷川武四郎)された。